

現代社会における〈老い〉
近代化と人間の商品化の視点から
Growing old in Modern Society
From the Viewpoint of Commodification of the Human Workforce and
Modernization

大倉 茂

OHKURA, Shigeru

1 はじめに

本稿の課題は、現代社会における〈老い〉について、若者たちにとって忌避されている〈老い〉の社会的意味を近代化と人間の商品化の視点から考えることである。

〈老い〉が、老人保健施設や病院、あるいは孤独死として注目されるようにアパートの一室に閉じ込められている。さらにいえば、現代社会では、必ずしも社会的に〈老い〉た存在として扱われない若者たちであっても、人間を商品化する社会のなかで生きるうちに、〈老い〉の特殊な位置づけを内面化し、自己の中の〈老い〉を忌避する傾向があるようにも見受けられる。〈老い〉とは、本来、ごくありふれたもののはずである。同時に、〈老い〉た存在は、自由な存在であるはずである。それにも関わらず、〈老い〉そのものを問題としてとりあげざるをえない社会状況がある⁽¹⁾。なぜこのような社会状況になってしまうのか。

本稿では以下のように議論を進めていく。こうした問題の所在を、第2節においてより鮮明にし、〈老い〉の諸相に関する第3節の考察を踏まえて、第4節、第5節において、近代化⁽²⁾と市場経済の物象化の論理の中で人間を商品として捉える現代社会

における若者たちにとっての〈老い〉を考える。そして最後に、第6節にて〈老い〉を肯定的なものとして捉える本稿のまとめにかえて〈老い〉の両義性を捉えうる社会の道筋を提起したい。

2 現代社会における〈老い〉

日中、テレビをつけると、セカンドライフなどといったように、〈老い〉が前向きに語られる。その一方で、夜のドキュメンタリーでは、過酷な〈老い〉の現状が語られる。セカンドライフなどというとき、高齢者がもっぱら市場社会の手段として扱われていることを見逃してはならない。昨今のマーケティングは、お金を持っている層の60代から70代を狙っているのだという。この例のように、最近、ブームと言われるものは、高齢者が牽引しているケースが多い。たとえば、1986年と2011年の「年齢階級別スポーツの主な種目の行動者率」⁽³⁾という統計においても登山・ハイキングの行動者率が向上しているのは、60歳以上のみである。それ故に、活発な高齢者像が、市場経済の中で「作られる」。そのように考えれば、〈老い〉をポジティブに受け止められるのは、有閑階級だけなのかと問わねばならないだろう。

さらにその裏側には、「活発な高齢者」から排除された〈孤立〉した高齢者が多くいることにも注意しなければならない。ここには、多くの社会問題が社会的弱者の中に顕著に現れるのと同様の構図がある。彼らは〈老い〉のネガティブな側面を押しつけられた結果、それを一手に引き受ける。若者たちは同時に、彼らのようにはなりたくないアンチエイジングを叫ぶ。だが、〈老い〉は、体力的には低下するものの、同時に賃労働から解放されるがゆえに自由な存在になり得るはずである。〈老い〉をポジティブに受け止められるのは有閑階級だけなのか。きっとそうではない。〈老い〉た存在は自由な存在のはずである。

他方で、現代社会において、〈老い〉をめぐる事態は一層苛烈な状況になっているようにも見受けられる。少子化と軌を一にしている日本社会の高齢化は、少子高齢化の過度な進行の中で、〈老い〉をネガティブなものとして忌避している場合ではなくなっている。高齢者にも労働の一翼を担わせようというわけである。しかし、この傾向も老老介護の末の老夫婦の心中事件、介護の苦痛などを引き金にした家族内の殺人事件など、高齢者に負担のしわよせが集中する構図も見受けられる。

このように〈老い〉をめぐる問題群が噴出する現代社会において、「〈老い〉とはなにか」、「社会における〈老い〉」などといった問いをたて、〈老い〉を改めてラディカルに問わねばならない時期にきているのではないか。

以上の問題意識を踏まえて、次節においてそもそも〈老い〉はどのように捉えられうるかという視点から〈老い〉の諸相について考えてみたい。

3 〈老い〉の諸相

あるときから、これまでより疲れを過剰に感じるようになる、あるいはかすり傷の治りが遅くなるようになる、はたまた足腰が弱くなったとを感じるようになる。そのような身体・生命的な〈老い〉のみならず、社会的な〈老い〉ともいべき現象もある。いつの頃からか電車に乗れば席を譲られるべき対象として扱われ、労働力商品として見なされず「働く」空間から排除される。このように、社会的な〈老い〉は、身体・生命的な〈老い〉に見舞われていない状況においても現れうる。賃労働の場が社会に参加する主たる場であるといえる現代社会において、労働力商品として見なされず「働く」空間から排除されることは、すなわち社会からの排除を意味する⁽⁴⁾。その帰結が、冒頭で示した〈老い〉の閉じ込めにつながる。そういった意味での〈老い〉の位置づけが社会の中で中心を占め、個人に内面化されていく。その帰結として、現代社会のアンチエイジングブームなどのように、社会において必ずしも〈老い〉を備えた存在と見出されない若者たちが、自己の中の〈老い〉を忌避する傾向が現れる。この忌避傾向こそが、現代社会に特有の〈老い〉の見方を醸成しているものではないかと考える⁽⁵⁾。

こうした社会的な〈老い〉が現れること自体は、進化の所産ともいえるようだ。霊長類学者の伊谷純一郎は、「チンパンジーの雌にも閉経はあるのだろうが、野生状態でそれほどまでに生きた個体の例は知られていない。ずいぶん年をとっていると思われる雌でも、まだ繁殖能力をもっていて子供を産む」（伊谷 1986：120）と述べている。すなわち、野生状態で〈老い〉た個体は多くは存在しないのである。さらに、伊谷は「老境とは進化の所産であり、もともと人間らしいヒトの属性の一つに高齢者をあげて

よいということである」(伊谷 1986 : 126) として
いる。これらのことを通して、少子高齢化問題^⑥は、
人間ならではの問題であるともいえる。他方で、
「高等類猿の複雑な構造をもつ社会には、明らかに
老齡と認めうる個体の存在に気づく」(伊谷 1986 :
121) という。チンパンジーの中でも高齢と思われ
る個体があるのだ。その高齢な個体は、「群れの中
にいて、群れをリードし、群れの集まりのまきに核
として生きる」(伊谷 1986 : 121) のだという。さ
らに、「人が年をとるとく動物にも老境に達した
ものがおり、そういった個体は一種の超能力を備え
た畏懼すべき存在として受け止められてきたように
思われる」(伊谷 1986 : 119) と〈老い〉のポジ
ティブな面を高齢な個体が担っていたという。現代社
会における〈老い〉の捉えられ方からすると少々ギ
ャップがあるように考えられるが、そこで伊谷は
「老齡は稀な存在であった。稀であるが故に、畏敬
すべき対象であった。今日の老齡者をめぐる数々の
問題点の一つは老齡がけっして稀な存在ではなくな
ったことにもよるものであろう」(伊谷 1986 : 119-
120) とし、高齢な存在が積極面を担いえたのは
〈老い〉が稀な存在であったからだという。

4 〈老い〉の両義性

「老いは、その両義性において際立つ」と主張す
る社会学者の栗原彬は、次のようにいう。「老いは、
愚かさ、醜さ、汚穢、非生産性を意味すると同時に、
英知、無垢、聖性、自由な遊びといった属性をもつ」
(栗原 1986 : 19) と、すなわち〈老い〉がポジ
ティブな側面とネガティブな側面とを備えるというの
である。歴史的変遷では、この両義性が、どちらか
が出れば、どちらかが消えといった具合で表出して
いたといえる。したがって、〈老い〉の二様の側面

は、身体・生命的な〈老い〉を基礎にしつつ、社会
的な〈老い〉の捉えられ方によって、どちらが表出
するかが決定するよう思われる。したがって、
〈老い〉の両義性を論じる場合、社会的な〈老い〉
に焦点を当てて考える必要がある。具体的にいえば、
以下のようになる。もともと〈老い〉は、〈老い〉
が稀な存在であったことも相まって、理知や聖性と
いったポジティブな文脈に位置づき、老人たちも共
同体の中で存在意義を見出し、見出されることが多
かったのである。しかし、資本主義の成立や科学技
術の発展(近代化)の中で、人間の寿命が延びるこ
とによって〈老い〉が稀な存在ではなくなったため、
〈老い〉は、醜さや非生産性といったネガティブな
文脈に位置づくようにもなった。また、社会哲学
者の今村仁司は「ゆっくりと時間が流れ、変化や変動
がそれほど大きくなく、あるいは気づかれないほ
どにゆっくりと変化する社会のなかでは、老いて
いくということは、現代が直面しているような否定
的な形で問題になることはまずなかったとみてよい」
(今村 1992 : 37) とし、「老いが問題としてたてら
れたのは、老いに対抗する人生の局面が格別の意味
を持って登場したからである」(今村 1992 : 37) と
している。私なりに言い換えれば、〈老い〉をネガ
ティブな文脈に位置づかせる作用が働くということ
は、〈老い〉ていない年月のポジティブな意味がこ
とさら強調される社会状況であるということである。

したがって、〈老い〉概念は、身体・生命的な
〈老い〉を基礎にしつつ、個人と社会の相互関係の
中で変化していき、定年などの制度化を通じて外在
化されていく過程で、個人に内面化されていくこと
になった。その内面化の帰結として、現代社会のア
ンチエイジングなどのように、社会において必ずし
も〈老い〉を備えた存在と見出されない若者たちが、

自己の中の〈老い〉を忌避する傾向があるといえる。
〈老い〉をもっぱらネガティブに捉える、現代社会の〈老い〉の特殊な位置づけではなく、同時に〈老い〉をもっぱらポジティブに捉える位置づけでもない、〈老い〉の両義性を捉える観点を社会に再定位されなければならない。

5 若者にとっての〈老い〉

現代社会の若者たちは、〈老い〉ることを忌避する傾向が強い。それは、アンチエイジングといった言葉で象徴的に語られうる。アンチエイジングブームをふとしたときに客観的に眺めると奇異に映る。アンチエイジングは、美容の文脈で語られることが多いが、美容に還元され得ぬ〈老い〉への忌避がそこにはあるように思われる。では、なぜ若者たちは〈老い〉たくないのか。

市場経済が席卷している現代社会において、若者たちは「生きること」を問いながら就職戦線に挑む。自らの人間としての価値を問いながら、就職戦線で格闘する。しかし、市場経済が席卷し、しかも不況下にある現代では、労働市場でものをいうのは売り手である就職先の商品価値になっているのだが、若者たちはそのような批判に触れることなく、賃労働の空間を確保することとなる。したがって、賃労働をはじめれば、連帯の仕方を知らない若者たちは、その空間を確保してもなお、その空間を保持するために、過酷な労働を強いられなければならない。彼らにとっては、賃労働の空間からの離脱は、社会から離れることを意味するようになっている。それゆえに、どんなに過酷であろうと、その賃労働の空間にしがみつかなければならない。そこから精神疾患にかかったり、過労死したりするといういたましい事態が発生する。過労死問題が象徴するように、日本社

会において過酷な労働環境は継続している。昨今は労働環境が特に悪い企業を「ブラック企業」といった語で指し、社会問題として取りざたされている。しかしながら、就活自殺、就職うつなど、就職活動の段階で精神的に追い詰められるケースも指摘されている（森岡 2011）。このような状況下で、〈老い〉て賃労働の空間から離れなければならないという将来的な恐怖が、換言すれば、社会から排除されるかもしれないという将来的な恐怖が、先取りのにふりかかってくるかたちで、現代社会の若者たちの〈老い〉への忌避として現れているのではなかろうか。こうして、若者たちは、漠然とした先取りとしての〈老い〉への恐怖を感じているのだといえまいか。

このように〈老い〉への恐怖が一方向的に増幅していく状況は、現代社会において、前節で論じた身体・生命的な〈老い〉と社会的な〈老い〉との大きな乖離が生じていることを示している。身体・生命的な〈老い〉を必ずしも感じていない世代が、社会的な〈老い〉を忌避しているからであると思われる。それは視点を変えれば、〈老い〉ているかどうかを決めるのが社会の側に委ねられており、その社会の側の視点を若者たちが内面化しているといえる。すなわち、〈老い〉ることは、賃労働の空間からはずれ、そのことが社会から排除されることを意味する現代社会の構図を内面化しているのである。したがって、この現代社会特有の〈老い〉のあり方を克服するためには、賃労働以外の労働のあり方を社会に位置づけること、つまり人間の脱商品化が重要な意味を持ってくる。

6 おわりに

最初に提示した問いは、なぜ〈老い〉を忌避せざ

るをえない社会状況になってしまうかであったが、これまでの議論を踏まえた上でなにが問題だろうか。それは社会が、そのまま賃労働の空間となってしまうことにある。言い換えれば、社会における労働が賃労働、すなわち人間が商品化することと一致してしまっていることに問題がある。この問題の克服には、人間の脱商品化が求められ、その先には市場経済の縮減がある。強調しておきたいのは、ここでいう脱商品化や市場経済の縮減は、商品化の否定や市場経済の否定をすぐさま意味しないということである。脱商品化や市場経済の縮減がなされた社会でも、現代社会とは異なるかたちでの商品化や市場経済が存在しうる。ここで批判しているのは、人間がもっぱら商品と扱われること、さらには市場経済の全面化なのである。人間の脱商品化の道筋を考えるには、人間の脱商品化をもう一步深めて考える必要がある。

人間の脱商品化は、単に人間を商品として扱わないということだけを意味するのではない。そもそも人間の労働力は、人間の身体性、ないしは生命性に基づいている。すなわち、人間の労働力の商品化は、人間の身体・生命性の商品化なのである。先の身体・生命的な〈老い〉と社会的な〈老い〉の相違を踏まえて考えれば、身体・生命性の〈老い〉がそのまま労働力商品としての劣化を意味し、身体・生命性の〈老い〉が進行すれば、労働（力）市場からの排除を意味する。しかしながら、それは賃労働からの排除を意味するのであって、労働からの排除を意味するのではない。したがって、〈老い〉の考察は、労働のあり方の捉え直しを迫るのである。アイデアとして述べれば、中期的には福祉国家にみられるように公的に高齢者の生活基盤を支えることが求められるが、長期的には自然に対する労働（園芸や農作

業など）やケア労働（老人福祉だけではなく、福祉一般など）は賃労働から外れ、市場経済から離れた労働として社会に位置づけるべきであろう。このように考えると、人間の脱商品化を敷衍すれば、それは生命性・身体性の脱商品化であり、根源的に考えれば、自然の脱商品化に行き着く。そのことを踏まえて考えれば、人間の脱商品化と自然の脱商品化は、同じ枠組みで捉えることができる⁷⁾。

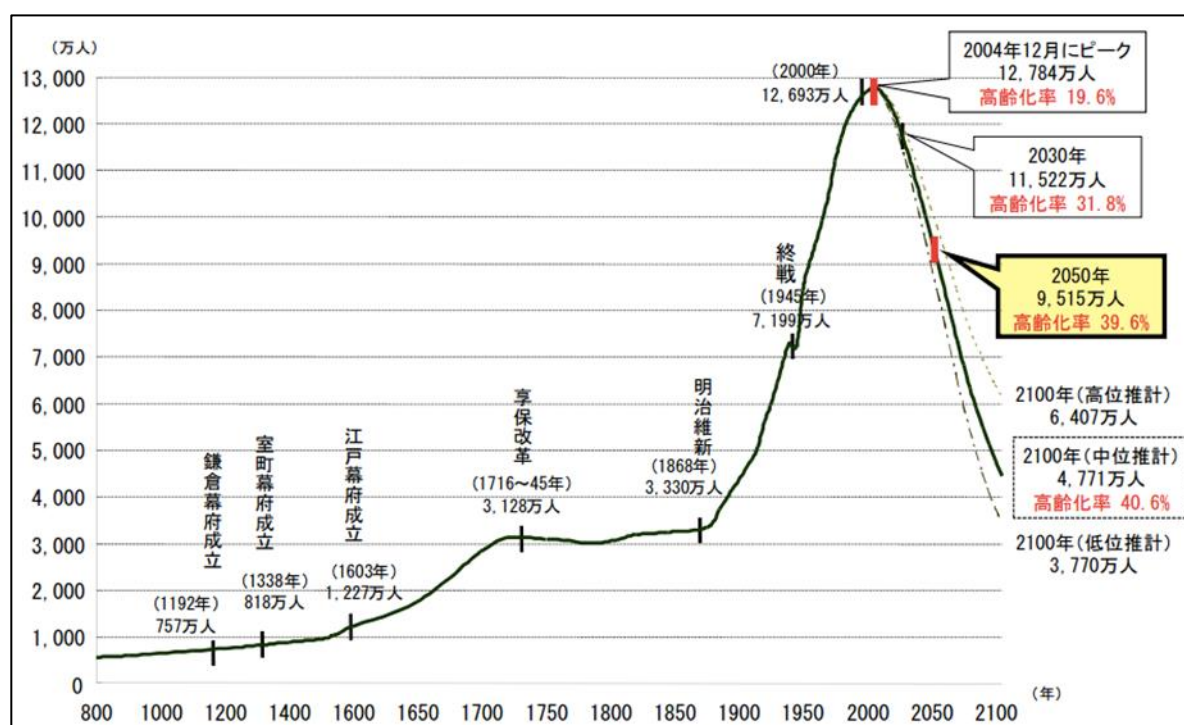
したがって、先の栗原の「老いは、愚かさ、醜さ、汚穢、非生産性を意味すると同時に、英知、無垢、聖性、自由な遊びといった属性をもつ」との主張に見られるような〈老い〉の両義性を捉えうる社会に向かうためには、人間・自然の脱商品化を志向する将来社会を構想する必要があるだろう。そして、その成果を〈老い〉というテーマだからこそ、世代間対話を通じて成熟させていかなければならない。

注

(1) 哲学者の鷲田清一は、「〈老い〉は、『少子高齢化社会』という言葉とともに、私たちの時代が抱え込んだ深刻な『問題』として論じられることが多い。が、これが『問題』だとは、わたしはおもわない。わたしが、そして身のまわりのひとが、なんらかのかたちでこれをひきうけてゆかざるをえない、ただそれだけである」と述べている。そう、〈老い〉することは、われわれにとって避けられないことなのである。言い方によっては、われわれは、生まれながらにして、〈老い〉はじめているということもできる。したがって、われわれは生まれながらにして、〈老い〉との共存を受け入れなければならない。本稿では、〈老い〉をこのように捉えてみたい。そのように捉えることで、先の課題に取り組むことができるように考える。

(2)周知の通り、近代化によって人口は急増し、世界の人口も70億人を突破したとされる。無論、日本も図1にあるように、明治維新以後、人口が急増していることがわかる。同時に2004年に人口のピークを迎え、その後人口の減少が続くと試算されている。(実際には2010年に人口のピークを迎え、現在減少傾向にある。<http://www.stat.go.jp/data/nihon/02.htm>) 他方で、高齢化率は増え続けること

が試算されている。また、近代化は医療技術の進展も促した。もちろん、医療技術の進展が人口の急増、高齢化率の上昇に寄与しているわけだが、具体的には延命治療にも見られるように近(現)代医療があるからこそ考えなければならない〈老い〉の問題もある。



〔図1〕

(出典) 総務省「国勢調査報告」, 同「人口推計年報」, 同「平成12年及び17年国勢調査結果による補間推計人口」, 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」, 国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析(1974年)をもとに, 国土交通省国土計画局作成(<http://www.mlit.go.jp/common/000135837.pdf> から引用)

(3) <http://www.stat.go.jp/data/topics/topi643.htm> (2014年1月20日確認)

(4) 引退世代が、趣味も見いだせず、自宅で無為に時間を過ごす(過ごさざるを得ない)という現象は、賃労働の場が社会に参加する主たる場であることを象徴的に表す事例であることを示している。

(5) 〈老い〉をネガティブな文脈に位置づかせること自体は、歴史貫通的なことである。一定の年齢を

越えて「年はとりたくないね」ということは、現代社会特有の言説ではない。たとえば、キケローは老人が惨めなものと思われる理由は四つあると述べている。「老人が惨めなものと思われる理由は四つ見出される。第一に、老年は公の活動から遠ざけられるから。第二に、老年は肉体を弱くするから。第三に、老年はほとんどすべての快楽を奪い去るから。第四に老年は死から遠く離れていないから」（キケロー2004：22）。しかしながら、「無謀は若い盛りの、辛抱は老いゆく世代の、持ち前というわけだ」（キケロー2004：26）、「体力の適度の使い方さえあれば、そして各人ができるだけところで努めるならば、体力をほしがりすぎることはあるまい」（キケロー2004：36）、「快楽をそれほどほしがらないというのは、老年への非難でないばかりか、最高の褒め言葉である」（キケロー2004：46）というように〈老い〉にポジティブな意味も同時に踏まえていることは注意が必要であろう。キケローが大カトーに代弁させるところによると、「わしにとって老年は軽いのだ。そして煩わしくないどころか、喜ばしくさえもあるのだ」（キケロー2004：78）だそうだ。

(6) 広井良典は、「人口減少社会（筆者注：現代社会のこと）は日本にとって様々なプラスの恩恵をもたらしうるものであり、私たちの対応によっては、むしろ現代よりもはるかに大きな『豊かさ』や幸福が実現されていく社会の姿であると考えられている」（広井 2013：3）と少子高齢社会に対して前向きな見解を示している。社会がそのまま賃労働をする空間となっている現代社会においては諸価値が経済的価値に一元化され、子供がリスクであると受け止められる。そのような状況下にあっては、脱少子高齢社会への道筋も本稿の人間・自然の脱商品化によって示されるように考えるが、脱少子高齢化が「産め

よ、増やせよ」の再来にならぬよう（この方向では、社会を賃労働の空間と見なす方向と一致する）広井などの人口減少社会のポジティブな側面を強調する議論にもしっかり目を向けるべきであろう。また、現在の環境問題を考えてみても高齢化率を下げる努力はしつつも、環境負荷の高い生活を送る日本においては特に、人口増加は望むべきではないと考える。(7) 〈老い〉を物象化の視点から論じた論文、著作は、管見では見つけることができなかったが、少子高齢化の問題も含めて福祉社会（ないしは国家）と物象化（ないしは脱商品化）を関わらせる議論はエスピン・アンデルセンなどによってなされている。その中でも竹内（2014）は、現代の物象化された私的領域に基づく市場秩序の拡大を批判しながら、「市場秩序『外部』にある社会権的領域」について論じている。本稿では十分に展開できなかったが、本稿で主張していた市場経済の縮減の先にある社会像を構想する上でも、現代的な意味での福祉社会のあり方を具体的に問うていくことが今後の課題であろう。

参考・引用文献

- 伊谷純一郎（1986）『『老い』—生物と人間』『老いの人類史』岩波書店、pp. 117-128
- 伊藤光晴他編（1986）『老いの人類史（老いの発見 1）』岩波書店
- 同上（1986）『老いのパラダイム（老いの発見 2）』岩波書店、
- 同上（1987）『老いの思想（老いの発見 3）』岩波書店
- 同上（1987）『老いを生きる場（老いの発見 4）』岩波書店
- 同上（1987）『老いと社会システム（老いの発見 5）』

岩波書店

今村仁司（1992）「老い—排除と差別」『仏教』

（No. 18），宝蔵館，pp. 37-47

金子勇（2006）『少子化する高齢社会』日本放送出版協会

キケロー（2004）『老年について』（中務哲郎訳）岩波書店

栗原彬（1986）「『老い』と〈老いる〉のドラマトルギー」『老いの人類史』岩波書店，pp. 11-48

竹内章郎（2014）「社会権〔法〕的領域の意義」，高橋弦・竹内章郎編著『なぜ，市場化に違和感がい
だくのか』晃洋書房，pp. 158-175

東京大学高齢社会総合研究機構（2010）『2030 年超高齢未来』東洋経済新報社

広井良典（2013）『人口減少社会という希望』朝日新聞出版

森岡孝二（2011）『就職とは何か』岩波書店

山田昌弘（2007）『少子社会日本』岩波書店

鷺田清一（2004）『老いの空白』弘文堂

大倉 茂（東京農工大学，茨城大学，前橋高等看護学院非常勤講師，立教大学兼任講師）